

★海外文献紹介★

『振り返って、方向性を探る』

by Sara L. Leaper

『標準テストと調価』

by Vito Perron

Childhood Education

October 1976

“Childhood Education”第五十三卷（一九七六—七七）は、全号をACEIのアクション・プログラムの三つの柱、「人間性の涵養」について意味のある、現実的な方法の探索に当てている。第一号（一九七六年 十月）では、最初に前ACEIの会長で、現メアリーランド大学教育学部教授サラ・ハモンド・リーパー博士の「振り返って、方向性を探る」という論文を載せ、このテーマの基本的課題を明らかにしようとしている。雑誌編集者コーエン氏によれば、この論文は建国二百年記念行事とも深いかわり

をもって企画されたそうで、同じく幼稚園百年を迎えた我が国の幼児教育関係者にも示唆するところの大きい論文ではないかと思われる。リーパー博士の結論を先に述べてしまえば、今一度「全体的な子ども」(The Whole Child)の教育の必要性を強調するもので、幼き人間の教育の健全な「常識」を米国の幼児教育界に回復させようとする意図が伺える。リーパー博士はどういう根拠をもとに、このような結論を導き出したのであろうか。また、「全体的な子ども」の教育とは具体的にどのようなものとしてとらえているのだろうか。この二つの観点からリーパー博士の内容を紹介してみよう。

リーパー女史にとって「未来」という言葉から連想するのは、かつてACEIの会合でジェイムス・ハイムス二世の語った次の言葉である。「明日への最善の備えは、今日を豊かに充分に生きることである」また、「豊かに充分に生きる」子どもの教育のことを想うとき、同じく思い出すのは別のACEIの会合でのキルパトリックの言葉——「子どもは生活から学ぶ。生活を受け入れ、生活の中で働きかけて学ぶのである」——である。幼児教育への深い洞察をもった二人の言葉を統合すると、未来の教育の方向はおのずから全人教育を目ざすものとなってくる。心理学者マズロ

ウは、かつて、「使用されない能力や器官は、病いの中心になり、萎縮して、人間の能力を低下させる」と言ったが、最近の爆弾事件や銀行強盗、その他の社会の凶悪な犯罪を見ると、明らかに、子どもの全体的な教育がなおざりにされてきたことがわかる。

精神（認知的、知的）、身体そして感情（情緒、情動、社会性）は、すべて重要である。その一つがおろそかにされても、それらの相互関係が無視されても、問題が生じるにちがいない。このような観点から、リーパー女史は、「私たちの仕事は、このすべての領域の諸能力が発達するように子どもたちを助けることである。」と主張するのである。

人間の全体を構成する三つの領域は、具体的にどういうものだろうか。

知的、認知的領域は、しばしば読みと算数につなげて考えられるが、フレイツァーの指摘するように、「学んだ技能は、それを実際場面で応用してみない限り、それが身についたかどうか、保障できない」のである。それでは、本当の資質の発達は、どのようにしてもたらされるのだろうか、次のような例を引用して説明している。

「ジョーは、テーブルを作っていた。ものさしが、テーブルの

足を測るために用意される。ジョーは、「見ただけで、足がちゃんとしているのがわかるよ」と答える。でき上がったテーブルはぐらぐら。すると、ジョーはがっかりして、「足を直す、あの棒はどこにあるの？」と尋ねた。この教師が用意した『棒』は役立ったのである。ジョーはその年の終りまでに、ものの測り方、すなわちインチとかフィートとか、ヤードについて学んだのであった。」

次に、感情、情動、情緒の領域には、肯定的な自己イメージや、自分や他の人々を快く思う気持ち、あるいは自己理解の発達などが含まれるし、身体的な発達には、栄養、休息と遊び、身体運動が含まれる。

さて次に、全体的な子どもを涵養するために、具体的にどのようなカリキュラムを持つべきであろうか。環境、メディアと市場、政治的活動、精神発達など、いくつか重視すべき項目をあげているが、必ずしも幼児教育に適しているとはいえないようである。

このようなカリキュラムを現実にくつすためには、教師も両親も子どもも、自信を持って仕事にとり組むこと、言い換えれば、子どもを受け入れ、子どもの熱意を受け入れることが大切である。

内から発生する動機をもとになすことによって学ぶ機会と、他の人々と関わる機会は、何かを獲得するためにどうしても必要なことである。

全体的な子どもの教育をおしすすめる場合、私たちは、子どもや青年のさまざまな側面——精神、肉體、感情——について、学習内容や学習方法について関心を持たねばならない。子どもたちは有効に育っていくのであって、はじめからそうできあがっていないのではない。有効な人間は、教育が誇るべきひとつの達成なのである。

ジェームズ・L・ハイムズ二世は、「明日を今作ろう——人的環境」という論文の中で、これを困難にする二つの異なる障害を指摘している。ひとつが技術的な問題であるのに対して、もう一つは、保育所、幼稚園、小学校、中学校、高校、大学等の教室の雰囲気である。そして、このような障害をとり除くのが教師であるとも言っている。

子どもの保育にたずさわる私たちにとって、子どもが十分に生きられるように助けてあげること——それは、毎日の保育の積み重ねであり、最も重要なこととして心に刻みたい。

次に、ノースダコタ大学のヴィット・ペロンによる「標準テスト

と評価」という論文を紹介しよう。これは、いかに最善に、人間の可能性と学力を評価するのかを論じている重要なものである。ペロンは、なぜ私たちはテストをするのか、その結果をどうするか、標準テストは生徒一人一人にいかん公正であるのか、何を選ぶべきかについて大きな問題を投じている。

現在、アメリカでは、標準テストが「転位知能 (Intelligence to alienation)」、成熟への自己概念 (self-concept to maturity)、創造的精神発達 (moral development to creativity) から、ほとんどすべての人の社会的特質が想像できるものとして存在している。あらゆる場所で、すべての年齢のアメリカ人に影響を与え、主に三歳から二十一歳までの若者に最も重くのしかかっている。A C E I や N A E S S P (National Association of Elementary School Principles 全国小学校長協会) では、特に、小学校の子どもたちへの影響を心配している。なぜなら、この時期は子どもの成長が一定でないし、学校で成功を要求される多くの技能は、流動的な獲得の場にあるからである。標準テストは、広範囲に、知能、言語、レディネス、達成、自己概念を評価する試みであったのである。私たちは、標準テストの利用に慣れてしまったために、評価すると表示していることを実際のテストが評価するかどうか、また、統計学的、精神測定学的構成を基底に持つ仮説が受け入れ

られるかどうかということに疑問を持たなくなっている。

私たちは、本当に、ある集団に行なわれたテストで、一人の人間の知能や能力が適切にわかると考えているのだろうか。標準テストの結果、「標準以上」の子どもたちだけが教育をうけられ、「標準以下」の子どもたちは、失敗者としてのレッテルをはられ、てしまう。

標準テストは、標準指導計画（基本教科書、要目、政府指針）に基づいており、予想期待があり、教師全部がそれで働くように期待されている。しかし、子どもたちはいろいろな方法で学んでいくので、私たちは、目的や目標によって変化のある計画をたてる。子どもたちは、人種的背景や経済的階級とは無関係に尊敬され、彼らの興味は、学習の基本的な出発点となる。だから、教師や子どもたちには、外的圧力は不必要なのである。

現在、標準学力テスト (norm-referenced achievement test) の他に、標準テスト (criterion-referenced test) があるが、これは一つの進歩である。しかし、これも限界があることを忘れてはならない。

私たちは、標準テストの利用と学校の点数の利用の包括的研究の計画をたてている。評価は決して不必要なものではなく、不可欠のものであるが、目的と一致していなければならない。標準テ

ストに頼らない評価の計画をたてるには、教師が、教室での子どもたちの生活の重要な点を描き、構成することである。教師は、学習の過程で、子どもたちに獨創性、責任感、努力の自発と自立を望んでいる。また、子どもたちの製作物や、根本的な人間関係、努力に対する尊敬、他の人々への感情を考えていきたい。ノースダコタ大学では、教師、子ども、両親との面接が、評価の計画とたえない発達の基本として利用されている。教師は、系統的な観察と、しばしばの会議と記録を通して、読み、言語発達、算数の領域で、子どもたちの発達を維持できる。教師が子どもたちに広範囲の学習活動を与えると、子どもたちは学習を広げるために、どこで何を要求するかという感覚を持つようになる。また、両親も教室で観察し、学校教育について知り、子どもたちの教育に総合的に寄与できるのである。

教師や学校が子どもたちにかわって努力の本質を証明し、意味ある評価をしなければならない。

日常、何の疑問もなく利用していて、当然のようになっていく標準テストをしないで、評価することは、教師にとって大きな抵抗があるだろう。しかし、目的と一致した評価をするには、何が最適であるのかを考えなければならない。勇気をもって、取りかんでいくべき課題である。（松山東雲短期大学・角能清美）